

資料

平成29年度性器クラミジア感染症及び淋菌感染症の抗原検査結果概要

カール由起・重村洋明・中山志幸・江藤良樹・濱崎光宏・世良暢之

平成29年度に当所に検査依頼された性器クラミジア感染症及び淋菌感染症に係る抗原検査の検体数はそれぞれ 867 件（男性 517 件、女性 330 件、性別不明 20 件）及び 866 件（男性 517 件、女性 329 件、性別不明 20 件）であった。そのうち、クラミジア抗原陽性検体は 40 件（男性 13 件、女性 27 件）で、陽性率は 4.6% であった。一方、淋菌抗原陽性検体は 3 件（女性 3 件）で、陽性率は 0.3% であった。

[キーワード：性器クラミジア感染症、淋菌感染症、抗原検査]

1 はじめに

性器クラミジア感染症及び淋菌感染症は、性感染症の中で罹患数が多い疾患である。国が実施する感染症発生動向調査によると、平成 29 年は性器クラミジア感染症 24,825 件、淋菌感染症 8,107 件が報告されており、いずれの感染症も平成14年をピークに減少しているが、平成21年以降はほぼ横ばいとなっている¹⁾。患者数が多い原因のひとつとして無症候性の感染者の存在が指摘されており、本人が感染していることに気づかないまま性交渉を行い相手に感染させ、新たな感染者も感染に気がつかずに、さらに感染を拡大させるという“無症候性感染の連鎖”によって、若者間で感染が拡大することが懸念されている^{2,3)}。

福岡県では性感染症予防対策の一環として、平成 16 年 3 月から性器クラミジア感染症について抗体検査を開始した。平成 25 年 4 月からは、尿を検体とする抗原検査に変更し、性器クラミジア感染症に加えて、淋菌感染症についての抗原検査も実施している。本稿では、平成 29 年度に実施した検査の概要について報告する。

2 方法

2・1 検体

検査には、平成 29 年 4 月から平成 30 年 3 月に県内 9 保健福祉（環境）事務所で採取した検査希望者の初尿 2 mLを用いた（クラミジア検査 867 件；男性 517 件、女性 330 件、性別不明 20 件、淋菌検査 866 件；男性 517 件、女性 329 件、性別不明 20 件）。

2・2 検査項目

初尿中のクラミジア抗原及び淋菌抗原について検査を実施した。

2・3 試薬及び機器

性器クラミジア抗原検査及び淋菌抗原検査には、アプティマ Combo2 クラミジア/ゴノレア（ホロジックジャパン株式会社）及び Ps-1000 分離機/As-1000 増幅検出機（富士レビオ株式会社）を用いた。

2・4 検査方法

RNA 抽出液 100 μ L に、陽性コントロール（クラミジア及び淋菌）400 μ L、又は、尿検体 400 μ L を加え、緩やかに攪拌した。Ps-1000 分離機を使用し、ターゲットキャプチャー法によりクラミジア及び淋菌の RNA を精製した。精製した RNA について As-1000 増幅検出機を使用し、Transcription mediated amplification (TMA) 法による RNA 増幅後、発光特性の異なるプローブを用いたハイブリダイゼーションによりクラミジア及び淋菌の抗原を検出した。

3 結果

平成 29 年度の性器クラミジア抗原検査及び淋菌抗原検査結果を表 1 に示した。搬入検体数は20歳代が309件（男性162件、女性147件）と最も多く、次いで 30 歳代が234件（男性138件、女性96件）であった。クラミジア抗原陽性は 40 件（男性 13 件、女性 27 件）、淋菌抗原陽性は 3 件（女性 3 件）であった。クラミジア抗原陽性率は、男性 2.5%、女性 8.2%であり、女性の方が男性より有意に高かった ($p<0.05$, chi-square test)。

4 考察

本事業の結果において、性器クラミジア抗原検査の陽性率は女性の方が男性に比べ高かった。福岡県結核・感染症

発生動向調査事業による報告では、平成29年の性器クラミジア感染症の男性患者数は634名、女性患者数は518名と男性の方が多い⁴⁾。これは、性器クラミジア感染症において、症状が出やすい男性は病院を受診することが多い一方で、女性は自覚症状に乏しいため、医療機関での受診に至っていない状況を反映しているものと考えられる。

国が実施する感染症発生動向調査における全国の性器クラミジア感染症及び淋菌感染症の定点当たりの報告数は、平成14年の47.73、23.91をピークに減少しているが、平成21年以降はほぼ横ばいで、平成29年は25.13、8.21であった¹⁾。一方、福岡県結核・感染症発生動向調査事業における性器クラミジア感染症及び淋菌感染症の定点当たりの報告数は、平成11年の98.3、80.1をピークに減少傾向にあるものの、平成29年は31.1、14.0と全国平均よ

りも高かった⁴⁾。これらのことから、多くの方に検査を受診するよう促し、無症候性の感染者を含む患者への適切な指導を通して感染拡大及びまん延を防ぐ必要がある。

文献

- 厚生労働省：感染症発生動向調査 性感染症報告数 (<http://www.mhlw.go.jp/topics/2005/04/tp0411-1.html>).
- 余田 敬子ら：口咽科 2011；24：2；171-177
- 性感染症 診断・治療ガイドライン2016（改訂版），日本性感染症学会誌：Vol.27, No.1 Supplement
- 福岡県結核・感染症発生動向調査事業資料集平成30年3月

表1 年齢区分別検体搬入数及び抗原陽性数（陽性率）

性別	年齢区分*	クラミジア		淋菌	
		検体数	陽性数(陽性率)	検体数	陽性数(陽性率)
男性	～19歳	5	0 (0.0%)	5	0 (0.0%)
	20～29歳	162	9 (5.6%)	162	0 (0.0%)
	30～39歳	138	1 (0.7%)	138	0 (0.0%)
	40～49歳	109	1 (0.9%)	109	0 (0.0%)
	50～59歳	46	2 (4.3%)	46	0 (0.0%)
	60歳～	47	0 (0.0%)	47	0 (0.0%)
	不明	10	0 (0.0%)	10	0 (0.0%)
	小計	517	13 (2.5%)	517	0 (0.0%)
女性	～19歳	18	3 (16.7%)	18	0 (0.0%)
	20～29歳	147	17 (11.6%)	147	2 (1.4%)
	30～39歳	96	7 (7.3%)	96	0 (0.0%)
	40～49歳	51	0 (0.0%)	51	1 (2.0%)
	50～59歳	8	0 (0.0%)	7	0 (0.0%)
	60歳～	4	0 (0.0%)	4	0 (0.0%)
	不明	6	0 (0.0%)	6	0 (0.0%)
	小計	330	27 (8.2%)	329	3 (0.9%)
不明	20	0 (0.0%)	20	0 (0.0%)	
計	867	40 (4.6%)	866	3 (0.3%)	

*年齢等は自己申告による